

笠井遺跡 2次



笠井遺跡 2次

一〇〇九

2009

(財)浜松市文化振興財団

笠井遺跡 2次



2009

(財)浜松市文化振興財団

例　　言

1. 本書は、宅地造成工事に先立ち、静岡県浜松市東区笠井町字西浦 493番の6の一部、493番16、493番17、外8筆で実施した笠井遺跡の発掘調査報告書である。
2. 笠井遺跡はかつて笠井町下組遺跡と呼んでいた遺跡であるが、周辺地域にも遺跡の範囲が大きく広がることが確認されたため、2007年に範囲及び名称の変更を行った。そこで1995年の笠井町下組遺跡の名称で行われた発掘調査を笠井遺跡1次発掘調査とし、今回の調査を笠井遺跡2次発掘調査とする。
3. 発掘調査　現地調査　2008年11月17日～2009年3月20日
(契約日　2008年11月14日)
整理報告　2009年4月13日～2009年12月25日
(契約日　2009年4月13日)
4. 調査体制　調査委託者　セキスイハイム東海株式会社（代表取締役　加藤正明）
調査受託者　財団法人 浜松市文化振興財団（理事長　庄田武）
調査指導機関　浜松市教育委員会
(浜松市生涯学習課文化財担当が補助執行)
調査担当者　小粥良和・川江秀孝・大野勝美（生涯学習課文化財担当）
補助調査員　熊谷洋子・藤森紀子（生涯学習課文化財担当）
5. 調査面積　426 m²
6. 本書の執筆・編集は大野勝美が担当した。
7. 遺構写真は川江と大野が撮影し、遺物写真是井口智博（生涯学習課文化財担当）が撮影した。
8. 調査に係る費用は、全額セキスイハイム東海株式会社が負担した。
9. 調査に係る諸記録および出土遺物は、浜松市生涯学習課文化財担当が保管している。

凡　　例

1. 掘図の方位は、真北である。
2. 標高は、海拔を示す。
3. 本書の座標値は、世界測地系に準拠する。
4. 遺構の略記号は下記の通り。

SD：溝　　SE：井戸　　SK：土坑　　SP：小穴　　SR：河川

本文目次

第1章 序 論		
1. 調査に至る経緯	1	第14図 II層出土土器(S区②)
2. 本調査の方法	2	第15図 II層出土土器(W区・N区)
3. 調査の経過	3	第16図 III層出土土器
第2章 環 境		第17図 SR01 出土土器
1. 地理的環境	5	第18図 遺構(SD)出土土器
2. 歴史的環境	5	第19図 遺構(SE、SK、SP)出土土器
3. 1次調査試掘の出土土器	7	第20図 特殊遺物
第3章 成 果		第21図 特殊遺物出土遺跡
1. 基本層位	8	
2. 换出遺構	9	
3. 出土遺物	15	
第4章 総 括	26	
参考文献	28	

挿表目次

表1 陶馬出土地(西遠江)	27
表2 香炉出土地(西遠江)	27
表3 緑釉陶器出土地(西遠江)	27
表4 製塙土器出土地(西遠江)	27
表5 壺G出土地(西遠江)	27

挿図目次

写真図版

第1図 笠井遺跡周辺の地形図	0	図版1A S区遺構(東から)
第2図 試掘調査の成果(土層柱状図他)	1	図版1B W区遺構(南西から)
第3図 試掘調査の出土土器	2	図版2A SR01と陶馬出土状況(東から)
第4図 笠井遺跡周辺の遺跡分布図	6	図版2B SE01(北西から)
第5図 1次調査試掘の出土土器	7	図版2C SE02・SE03(東から)
第6図 S区・N区の土層柱状図	8	図版3A SK01(東から)
第7図 遺構全体図	9	図版3B SK02(北から)
第8図 古墳時代の遺構	10	図版3C SP01(北東から)
第9図 奈良時代の遺構	11	図版4 出土遺物1
第10図 平安時代の遺構	12	図版5 出土遺物2
第11図 中世の遺構	13	図版6 出土遺物3
第12図 近世の遺構	14	図版7 出土遺物4
第13図 II層出土土器(S区①)	16	



第1図 笠井遺跡周辺の地形図

第1章 序 論

(1) 調査に至る経緯

笠井遺跡は、天竜川平野のほぼ中央部に位置し、笠井町の中心市街地のほぼ全域を占める。当遺跡はかつて笠井町下組遺跡と呼ばれていたが、周辺部での土器発見と試掘調査によって遺跡が広範囲に存在していることが分かってきたため、従来の「下組」という小地域の名称では不都合が生じてきた。そこで遺跡の範囲を拡大すると共に、より広範囲な地域を指す名称である「笠井」遺跡に変更された。

その笠井遺跡の範囲内において、セキスイハイム東海株式会社によって開発行為（宅地と道路の造成工事）が計画された。そこで平成20年9月に遺構の残存状況等の詳細を確認することを目的に試掘調査が実施された。試掘調査の結果、開発予定地の東側半分は近年まで沼地であったために遺構と遺物は皆無であったが、西側半分は土器を含む厚い包含層と遺構の存在が確認された（試掘調査の詳細については下記の通り）。

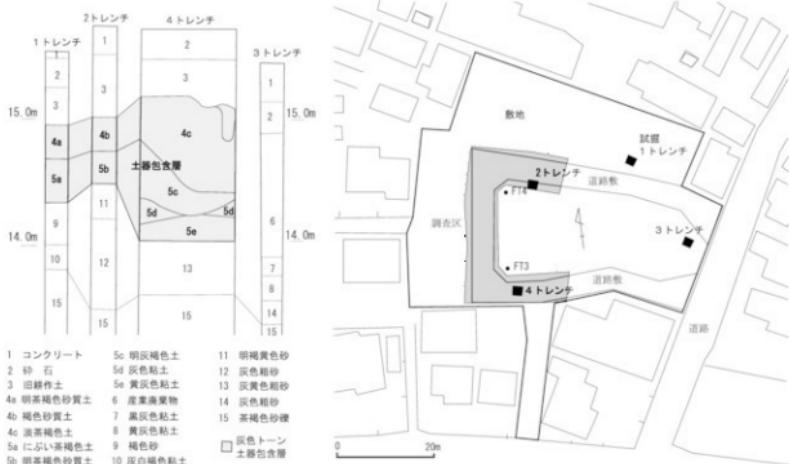
そこでセキスイハイム東海株式会社と協議した結果、造成工事により遺構を破壊しない分譲地部分は遺跡をそのまま地中に保存し、公道に移管される道路敷部分について本調査を実施して記録に残すことになった。ただし道路敷部分の東側半分は遺構と遺物が確認されなかつたため調査区から除外した。

・試掘調査

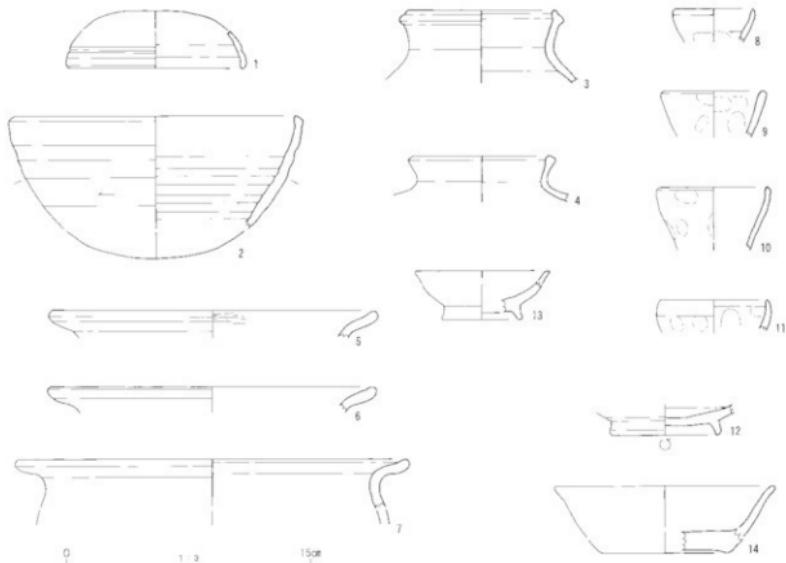
〔調査地〕浜松市東区笠井町字西浦439番6ほか10筆 〔調査日〕平成20年9月11日

〔調査面積〕約16m²（約2m×2mのNo1～No4試掘トレンチ）

〔調査方法〕バックホーで層位的に掘削して遺物の有無を確認した後、人力でトレンチの壁面を精査して遺構の有無を観察した。その後、土層を写真撮影すると共に図面に落とした。



第2図 試掘調査の成果（土層柱状図他）



第3図 試掘調査の出土土器

〔調査結果〕1、2、4トレンチは、上からコンクリートおよび碎石層、旧耕作土層、遺物包含層、砂層、砂礫層の順で確認された。遺物包含層は、標高14.3m～15.2mにあり、7～13世紀の土器を含んでいた。3トレンチは他のトレンチと異なり、産業廃棄物層の下に沼地に堆積する黒灰色粘土と黄灰色粘土が認められたことから、かつてはここが沼地であったと思われる。その後、沼地に産業廃棄物を埋めて整地した後に工場が建てられた。ここには包含層がなく、遺物も見られなかった。

4トレンチでは、中世の小穴が確認された。また当トレンチは、土層の堆積状況に乱れが認められることから、湿地などへの落ち際と思われる。

〔出土遺物〕第3図の1～4が須恵器で、1は7世紀前半の坏蓋、2は7～8世紀の鉄鉢形須恵器であり、珍しい。3と4は8世紀の広口壺の口縁部であろう。5～7が土師器の長胴瓶の口縁部で、時期は8世紀～9世紀初頭である。9と10は製塙土器の可能性があるが（本調査で近接地点から7点の製塙土器が出土している）確証がない。8と11は手捏ね土器または土師器の坏身と思われる。12は三日月高台をもつK90窯式の灰釉陶器碗で、時期は9世紀後半である。13は12世紀の山茶碗の有台小皿、14は13世紀の山茶碗の底部である。出土地点は、1～6と8～11が4トレンチの下層、13と14が4トレンチの上層、7と12が2トレンチである。以上のように、遺物は4トレンチに集中し、時期が7～13世紀と長期間に及ぶ。

(2) 本調査の方法

調査区の名称・他 調査区の形状が逆コの字形をしていることから、全体を3分割して北側部分を

N区、西側部分をW区、南側部分をS区とした。周辺に基準杭を6本設置したが、そのうちの調査区に最も近いTF3とTF4を利用して、通常の遺物取上作業と図面作成作業のための座標系を設定した(TF3をX=0、Y=0、TF4を見通す方向をX軸)。またTF3上の標高値(H=15.240m)を基準標高値(BM)とした。TF3とTF4の世界測地系における座標値は、(TF3)X=-136165.919、Y=-64374.926、(TF4) X=-136149.439、Y=-64374.573である。

表土等の掘削 表土を除去した後、平爪を装着した重機(バックホー)で旧耕作土層を慎重に掘削して行った。包含層に達すると土器片が出始めたので、そこでバックホーによる掘削を止めた。思いのほか、工場建物の基礎に伴う搅乱部分と排水によるグライ化部分が多く認められた。排土は、調査終了後に埋め戻すために、調査区の横に積み上げて保管した。

遺構の検出 鍬や鋤簾を使用して、人力により包含層の掘削と遺構の検出を行った。調査区は搅乱と土壤のグライ化が甚だしいことから、遺構の面的検出が非常に難しかった。そこで多くの土層観察用トレーナーを掘り、また搅乱部分に接する側面を土層観察することによって、より正確な遺構検出を心がけた。検出した遺構は、半裁掘削または土層帯を残して掘り下げ、遺構の埋土の把握に努めた。また主要な遺構は土層断面図を作成した。

図面の作成 遺構平面図の作成は、TF3上にトータルステーションを設置し、TF4を視準する座標系を用いて20分の1の縮尺で行った。土層断面図も20分の1の縮尺で作成・記録した。遺物出土状態図は、10分の1の縮尺で平面と立面を図化した。土層断面図と立面の図化に当たっては、TF3(H=15.240m)の標高値を基準とした。

写真撮影 カメラは主に6×7判を用い、フィルムはモノクロとカラーリバーサルを使用した。カラーリバーサルについては35mm判カメラでの撮影も行った。作業工程のメモ写真用にコンパクトデジタルカメラを使用し、高所撮影は3段のローリングタワーを用いた。

(3) 調査の経過

・現地調査(調査日誌より抜粋)

【1月5日】N区から重機で表土除去作業を開始する。N区とW区北半の表土除去を完了。

【1月6日】W区南半とS区の表土除去を完了。人力によりS区・W区II層の荒掘りを始める。山茶碗、内耳鍋、土師器、須恵器が出土。【1月7日】引き続きS区II層の荒掘り。青磁が出土。

【1月8日】S区を精査し、遺構と遺物の検出を計る。土層断面図を作成する。

【1月9日】雨天により屋外作業休止。【1月12日】雨天により屋外作業休止。基準杭を設置。

【1月13日】S区西南の搅乱坑を掘削除去。江戸末期から明治にかけてのゴミ捨て場と判明する。

【1月14日】S区IIa層の除去完了。河川(SR01)が西に延びているのを確認する。W区を荒掘り。W区上層で奈良時代の土師器甕がまとまって出土したが、土壤の青色化によって層位が識別できず。

【1月15日】SR01上層から陶馬の前半部が出土。【1月16日】SR01上層から陶馬の後半部が出土。前日の出土品と同一個体であった。【1月19日】SR01を清掃後、陶馬の写真撮影を行う。

【1月20日】W区のSR01上層の覆土を除去。7~13世紀の土器を含むことから、13世紀に川が埋まったと推定。【1月21日】雨天により屋外作業休止。【1月22日】同じく屋外作業休止。

【1月23日】水没したトレーナー等の排水作業を行う。S区西半のIIb層の除去。SD02を検出。

- 【1月26日】S区西半のIIb層の除去。SD02の東側でSD03を検出し、完形の山茶碗が出土。
- 【1月27日】SD02、SD03を掘る。SR01の中にSE01を発見する。掘り始めるが、青色化のため土層の識別が非常に難しい。上層からK90窯式の灰釉陶器片、下層から奈良時代の土器が出土する。
- 【1月28日】SD02、SD03を精査。SE01底から奈良時代の長頸壺と甕が出土。W区で近世の井戸を掘る。桶を底に据え上部を円碟組みにしたSE02、同じく桶を据えて竹組みにしたSE03。
- 【1月29日】S区・W区精査。SD02、SD03の土器出土状態とSE01の写真撮影。その後、両者の実測。W区の中層を除去したところ、溝2本が現れる。S区III層から陶馬の脚が出土。
- 【1月30日】雨天により屋外作業休止。【2月2日】W区のSR01の川底でSD04を検出。古式土師器片が出土。その南で初期須恵器片が出土。SR01以前に5世紀の遺構があったと思われる。
- 【2月3日】S区SR01東端の北壁で宝珠形摘み出土。層位は明らかにSR01の最上層である。
- 【2月4日】W区北半の掘削。5世紀から10世紀までの土器が混在している。
- 【2月5日】W区を清掃して、完掘写真を撮影する。【2月6日】S区III層から綠釉陶器片が出土。位置はSE01の東南50cm。【2月9日】S区III層から陶馬の脚が出土。
- 【2月10日】S区III層を精査し、SD07～SD08を検出。SK01から長胴甕1個体出土。W区SR01の中央部最下層と北側の岸を掘り下げたが、土器は皆無であった。
- 【2月12日】SK01の土器出土状態を写真撮影。その後、実測する。SP01から須恵器坏出土。
- 【2月13日】SK01の土器を取り上げたところ、下部から土師器坏身の完形品が出土。写真撮影後に取り上げ。SP02の1/10図面作成、その後に取り上げ。
- 【2月16日】風強し。S区III層を掘削、精査。SKを4基、SDを1条、SPを2基検出。
- 【2月17日】N区III層を掘り下げる。遺構はなく、土器も出土せず。S区のSK02とSP02の写真撮影。SX01を掘り下げる。竪穴住居の確認となるものは出土しない。
- 【2月18日】N区のIII層を掘削。S区はSK02とSP04の精査。SX01を掘り下げる。午後から土器洗い。全体写真撮影のために壁面保護シートの撤去とのり面の掃除。
- 【2月19日】掃除後に全体写真と個別写真を撮影する。【2月20日】雨天のため屋外作業休止。
- 【2月23日】S区SX01を再精査するが、確認は得られず。壁際にトレーナーを設定し、下層を調査。
- 【2月24日】SX01の下層にSD09を発見。竪穴住居状遺構はSD09の落ち込みと判明する。SD09の最下層から8世紀の坏蓋などの土器が出土した。
- 【2月25日】小雨の降る中、SD09を完掘する。8世紀の土器が多数出土。底面が南に向かって傾斜していることから、南流していたと推定する。本日で現地の発掘作業終了。
- 【2月26日・27日】発掘資材と出土遺物を神原埋蔵文化財調査事務所に運搬。ブレハブ明け渡し。
・遺物整理と報告書作成
- 遺物の整理作業と報告書作成業は、浜松市西区神原町の浜松市埋蔵文化財調査事務所で行った。ただし土器の洗浄と乾燥は現地調査と並行して実施し、ほぼ完了していた。
- 【4月6日～5月29日】遺構図面作成、遺構図面の版組とトレース、土器の注記と復元。
- 【6月1日～7月31日】遺物の実測、遺物の写真撮影、遺物図面の版組とトレース、原稿執筆。
- 【8月3日～12月25日】写真図版の版組、遺物と図面の整理保管、印刷校正・他。

第2章 環 境

(1) 地理的環境

浜松市を南北に貫く天竜川は、長野県の諏訪湖を源流とし、太平洋に注ぎ込む全長約216kmの長大な河川である。流域の大部分は急峻な山岳地帯であるが、浜松市天竜区二俣で平野部に至り、東の磐田原台地と西の三方原台地の間に広い沖積平野（天竜川平野）を形成している。現在、天竜川は平野の中央をまっすぐに南流しているが、この直線的な流路は近世以降に行われた度重なる河川改修により整備されたものであり、古い時代は「あばれ天竜」の名の示す通り、広い平野の中を自由気ままに流路を変え、本流と支流が入り乱れて網の目状に流れていたと推定されている。

笠井遺跡は、この天竜川平野のほぼ中央部に位置し、東の豊田川と西の安間川に挟まれた自然堤防上の微高地に立地する。微高地は笠井町から恒武町にかけての東西約1km、南北約2kmの広がりを持ち、いつの時代にも比較的安定した生活基盤を確保できたとみえ、古墳時代から中世にかけての遺跡が集中している（第4図参照）。そして現在も、中央部を貫く笠井街道（主要地方道天竜・浜松線）沿いに市街地が広がり、この地区の経済活動と交通の中心地となっている。

笠井遺跡の標高は、北側中央部が最も高く、南に行くに従って、また笠井街道から東西に離れるに従って、徐々に低くなっている。要するに笠井遺跡が北から伸びた舌状の微高地の上に乗っている。今回の調査区は、笠井遺跡の中央部の西端に位置し、南西方向に向かって僅かに下る緩傾斜地である。しかし周辺が市街化されているため、見た目では分からぬ。

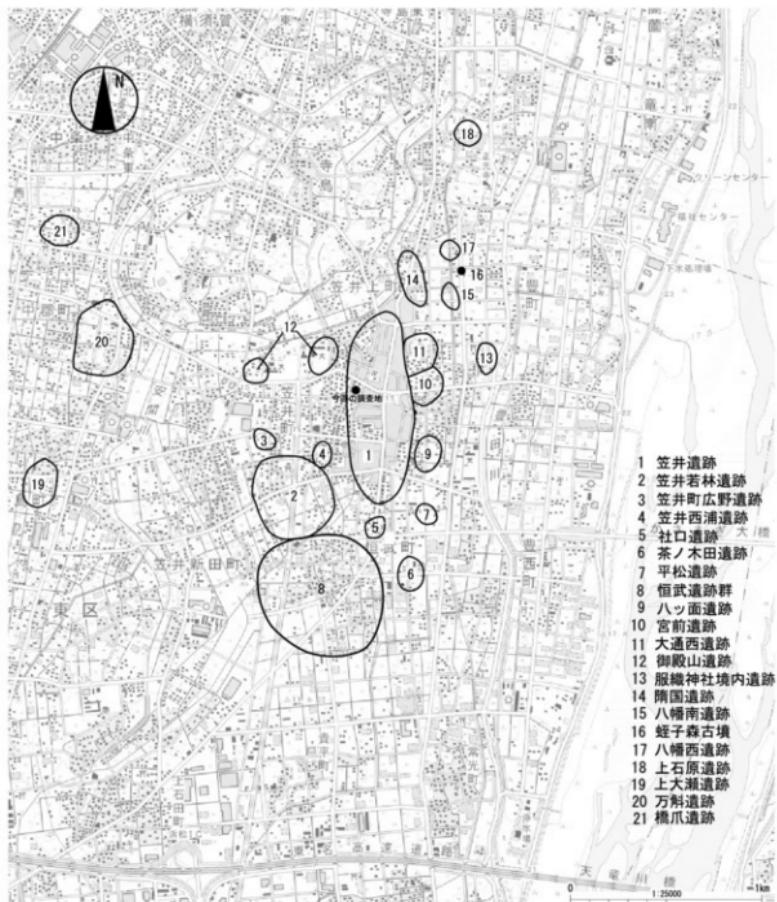
(2) 歴史的環境

縄文時代以前 現在までのところ、天竜川平野において、縄文時代以前の人々の生活した痕跡である遺構や遺物は発見されていない。やはり生活の中心地は三方原台地上にあったと思われる。

弥生時代 弥生時代になると、天竜川平野の地盤が安定し、人々が本格的に進出し始めた。最も早い時期の痕跡は、宮竹野際遺跡の縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての土器片である。また同遺跡で中期前葉の水田が発見されていることから、遅くとも中期前葉までには、天竜川平野で水田造営が始まっていたと思われる。また将監名遺跡において、中期中葉から始った集落が中期後葉に当地域の拠点的な大集落へ発展していることから、この時期には大規模な水田造営が行われていたことが推測できる。さらに後期になると、平野部の集落が爆発的に増大する。箕輪遺跡、天王中野遺跡、中田北遺跡、将監名遺跡、山の神遺跡、越前遺跡、大蒲村東遺跡、森西遺跡、松東遺跡、山寺野遺跡、寺西遺跡、海東遺跡などである。当然、大規模な水田造営が行われていたことであろう。

天竜川平野の各地に弥生の集落が展開する一方で、笠井地区では、この時期の遺跡が確認されていない。唯一、恒武遺跡群の山の花遺跡で弥生時代前期の小さな土器片1点（条痕紋系）が発見されている。新たに発見される可能性も否定できないが、現状では、笠井地区の弥生人の活動は低調であったと言わざるを得ない。逆に、なぜ低調であったのかが重要であろう。ここが天竜川の川底であったという説や中州であったという説があるが、確証はない。今後の課題の一つである。

古墳時代 古墳時代に入ると、笠井地区の人々の活動が一気に活発になる。生活の場として、安定した基盤が整ったものと思われる。前期では、恒武西宮遺跡の3次調査において、葬送儀礼に用いた大量の土器を伴う方形周溝墓が発見された。また総柱構造をもつ掘立柱建物を検出していること



第4図 笠井遺跡周辺の遺跡分布図

から、近くに有力な首長層が居住していたと思われる。

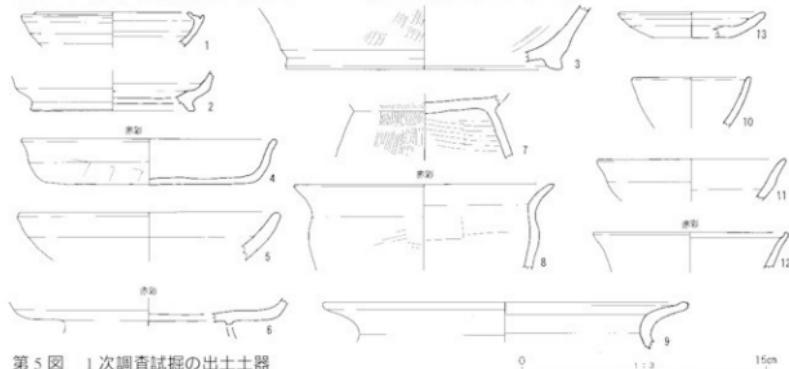
中期以降、天竜川平野を見下ろす丘陵上や台地上に古墳が築かれるようになった。特に三方原台地東縁一帯に広がる三方原古墳群で、総数500基を超える数の古墳が築造されている。笠井地区では、蛭子森古墳が知られている。蛭子森古墳は平野部に立地する径23.6mの後期の円墳で、全長10.6mの右片袖式石室を有し、鳥の装飾付須恵器、大刀、鉄鎌、馬具など豊富な遺物が出土した。台地上の群集墳が盛行する後期に、単独で平野部に立地する有力者の古墳として注目される。

古墳の調査例に対して集落の調査例は少なく、この時期の集落の実体は良く分からぬが、山の花遺跡と恒武西浦遺跡の自然流路で発見された大量の木製祭祀遺物と石製祭祀遺物が注目される。近畿地方以外で出土例の少ない衣笠型木製品や複数の杖状木製品が含まれてあり、中央政権と関係深い有力者が中央と同じ祭祀を執り行った証拠である。背景に天童川平野の経済力の強さが伺える。奈良・平安時代 律令体制下において、笠井地区周辺には、長田郡（709年に長上郡と長下郡に分割）、龜玉郡、磐田郡の三郡が置かれていた。これら三郡の正確な領域は不明であるが、おおむね現在の浜松市浜北区を中心とする地域が龜玉郡、浜松市東区を中心とする地域が長田（長上）郡、天童川東岸が磐田郡であったと想定される。笠井地区は三郡の境付近に位置し、古代においていずれの郡に属したか明らかではない。しかし笠井地区から注目すべき遺物が発見されている。笠井若林遺跡で墨書き土器と共に円面鏡が3点、獸足付短頸壺1点、鉄製帶金具、笠井若林遺跡の4次調査で綠釉陶器片1点、社口遺跡で円面鏡1点、山の花遺跡で墨書き土器と共に陶馬や人面墨書き土器が出土した。これらは普通の集落から発見されることは稀で、官衙的性格を持った遺物である。

中世 中世において、笠井地区周辺には羽島荘と美濃御厨が存在したが、これらの荘園の情報量は極めて少なく実体は明らかになっていない。しかしこの時期の遺構と遺物は比較的多く見つかっている。御殿山遺跡や笠井若林遺跡、恒武東覚遺跡で溝状遺構から山茶碗などが出土しており、また恒武西宮遺跡で鎌倉時代の菊花双鳥鏡が採集されている。

（3）1次調査試掘の出土土器

笠井町下組遺跡発掘調査（笠井遺跡1次）が1995年に実施されたが、その試掘で出土した土器が未報告であった。良い機会があるので、簡単に紹介しておきたい。第5図の1～3が須恵器。1は7世紀前半の环身の口縁部、2は8世紀の有台环、3は8世紀の甕の底部である。4～12が土師器。4は赤彩された8世紀の环身、5は9世紀の环身であろう。6は内外面が赤彩された有台环、7は台付甕の台部、8は内外面が赤彩された鉢である。9は8世紀の長胴甕の口縁部、10は小型鉢と思われる。11は环身、12は内外面が赤彩された8世紀の环身、13は13世紀の山茶碗の小皿である。以上のように、奈良時代を中心に、7～13世紀の土器が出土している。



第5図 1次調査試掘の出土土器

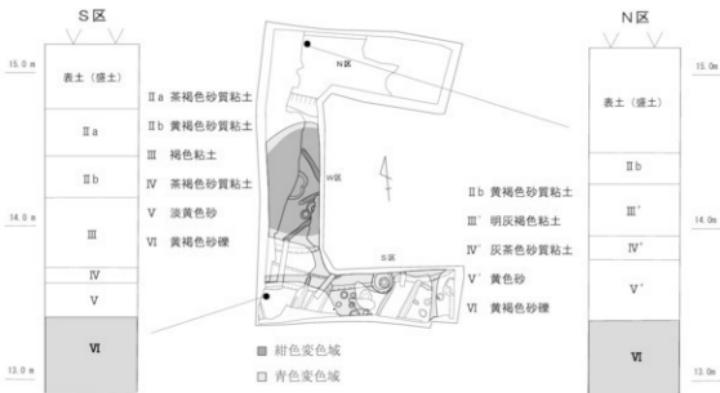
第3章 成 果

(1) 基本層位

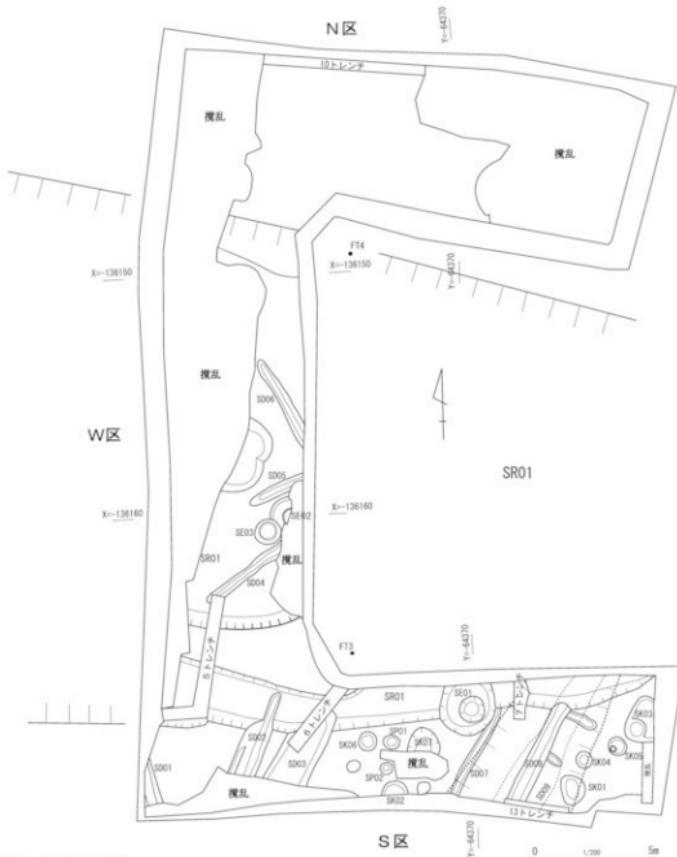
当調査区の上には、長年にわたって染色工場が操業しており、染色工程で出た排水を穴を掘って地中に浸透処分していたそうである。また近年まで周辺の排水溝網が整っておらず、U字溝の水も滞りがちであったと思われる。その痕跡が調査区の土壤に残されている。第6図の平面図に灰色トーンで示した青色変色域と紺色変色域である。青色変色域は、常に水に浸った状態であったために酸素不足になり、土壤が還元されて青色化・粘土化されたものである（グライ化）。S区の北端に東西に伸びる1条、S区の東半に南北に伸びる1条、S区中央からW区に向かって斜めに伸びる幅広い1条、計3条が認められる。この上には染色工場が操業していた時にU字溝が敷設されており、U字溝から漏れた水によって土壤が青色化したと推定される。そのことが明確に分かるのが第11図の土層図で、U字溝直下の4層と8層に漏れた水によってグライ化した不整形の青色変色域が確認できる。紺色変色域は更に悪条件が加わる。排水に含まれていた紺色染料が土壤の中に綿毛状に沈着している。おそらく紺色変色域の中央に地中浸透用の穴があったと思われる。このように調査区の土層は非常に把握しにくいものであった。

基本層位は、S区土層柱状図に示すように、上からI層の表土層、IIa層の茶褐色砂質粘土層、IIb層の黄褐色砂質粘土層、III層の褐色粘土層、IV層の茶褐色砂質粘土層、V層の淡黄色砂層、VI層の黄褐色砂礫層の順に堆積している。IIa層とIIb層は類似した土壤で、明確に分層できなかった。IIb層の方がやや黄色味が強い程度である。IIa層とIIb層は7～13世紀の遺物包含層、III層は7～9世紀の遺物包含層であり、IV層以下は無遺物層であった。VI層の砂礫が基盤層である。IIa層とIIb層が中世以降に、III層が奈良～平安時代に、IV層が古墳時代以前に堆積した土壤と考える。

N区も基本的にS区と同じであるが、少し土色と土質が異っていた。中間に川の堆積層、攢乱坑、グライ化による変色域があるため、両者の対応関係を把握するのに苦労した。



第6図 S区・N区の土層柱状図



第7図 遺構全体図

(2) 検出遺構

S区とW区で遺構を検出した。しかしN区は遺構が皆無であった。S区では、中央部で奈良時代の大溝や井戸と共に土坑や小穴を検出し、東半部で平安時代の2条の溝と土坑を検出し、西半部と北端で中世の3条の溝と川を検出した。W区では、古墳時代の3条の溝と近世の2基の井戸を検出し、またW区全体が中世の川の中であることを確認した。以下、それらの遺構を時代別に記す。

・古墳時代の遺構

SD04(溝) W区の南半部にある長さ4.3m×幅0.4m、深さ約15cmの溝で、非常に浅い。中世の川

によって削られて、底部だけが残ったものと思われる。底面の標高が北東に向かって低くなっていることから、水は北東方向に流れていたと推測する。遺物は、141の5世紀の土師器高壺の脚部が溝の西端から、台部が溝の西側延長線上から出土した。他の遺物が皆無であることから、溝は5世紀代に埋没したと推定する。

SD05(溝) SD04の北側に位置し、平行して伸びる長さ2.5m×幅0.5m、深さ約15cmの溝で、遺物はまったく出土しなかった。この溝の底面も北東方向に傾斜していることから、同方向に水が流れていたと推定する。掘られた時期は、SD04と平行に伸びることや覆土が同じであることから、SD04と同時期と考える。SD06(溝) SD05と直行する方向に伸びる長さ3.7m×幅0.5m、深さ約20cmの溝で、出土遺物は皆無であった。SD05との交差部は調査区外で、両者の新旧関係は分からなかった。他の溝と標高および覆土が同じであることから、5世紀に掘られたものと考える。

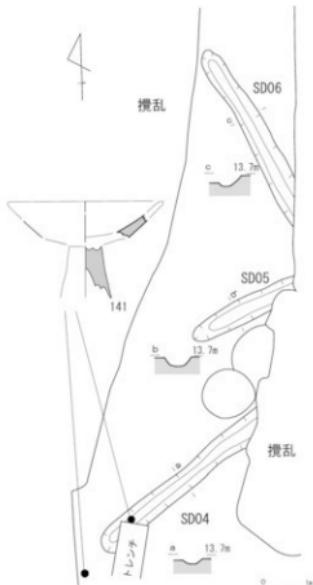
SD04～SD06が何に伴う溝なのかという点であるが、5世紀の水田耕作のための水路と推定する。第11図を見て分かるように、基盤層であるVI層の砂礫が中央部で標高がやや低くなっている。人々、ここは自然堤防上にできた小さな谷状地形であり、低湿地であったと考えられる。そこで水田が営まれていたのではなかろうか。

・奈良時代の遺構

SD09(大溝) S区の東半部にある長さ約6m、幅約4.2m、深さ約95cmの溝で、南西方向に伸びている。底面が南西方向に傾斜していること、土層に砂や砂礫をほとんど含まないことから、この大溝には南西方向への弱い流れがあったと推定する。

上層で平安時代の遺構を検出していた時、南壁に接して方形の遺構らしきものがぼんやりと見えていた。そこで竪穴住居と判断して十字の土層帯を残して慎重に掘り進んだ。しかし住居の証拠である炉も壁溝も柱穴も出てこなかった。これは変だと思い、再確認のため南壁に沿って土層観察用トレーナーを掘ったところ、下部に奈良時代の土器を含む幅広い溝を発見した。方形の遺構らしきものは、大溝の南半部分が沈下して上層の土壤が入り込んだものにすぎなかった。大溝の最下層(土層観察用トレーナー部分)から146の完形品の壺蓋や150の放射状暗文入りの赤彩された土師器壺身が出土した。したがって、この大溝は7～8世紀には機能していたが、遅くとも9世紀中頃には埋没したと推定する。

SE01(井戸) S区の中央にある大きさ2.3m×2.0m、深さ1.03mの規模をもつ土坑で、底部が砂礫層



第8図 古墳時代の遺構

に達していることから井戸と判断した。掘り方は2段で、途中に中段が廻っている。中段から下方へずり落ちるような状態で人頭大の平らな石が検出された。おそらく踏み石であろう。

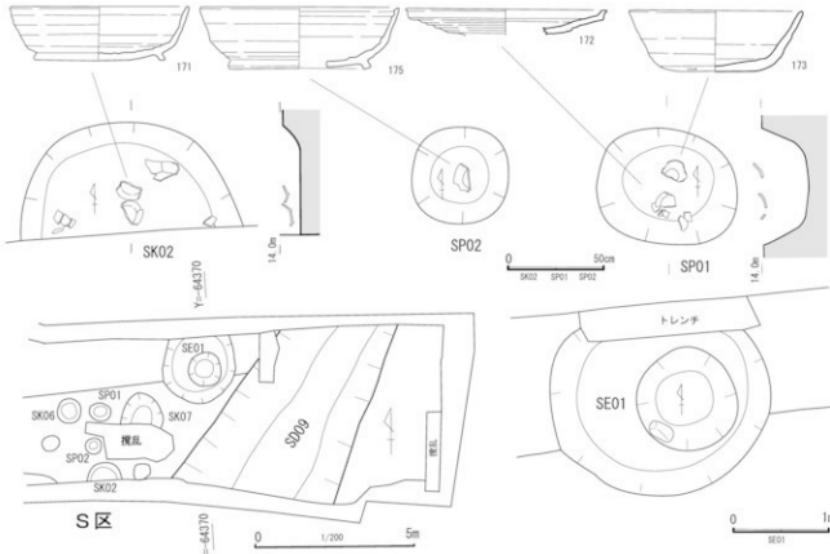
この井戸は青色変色域内にあり、土壤の違いがまったく識別できなかった。そこで調査区北側の壁際へ土層観察用のトレンチを掘って堀り方の発見に努めたが、はっきりと分からず、最終的には土の堅さと土器片の有無で掘り進めざるを得なかった。井戸の下層から161～164の8世紀のやや大きめの土器片が出土し、上層から9世紀後半のK90窯式の灰釉陶器細片が多数出土した。したがって、井戸は奈良時代に機能していたが、平安時代初頭には僅かな窪みを残すだけになっていたと推測する。

SK02（土坑）S区の中央部にある大きさ1.1m×0.55m、深さ約10cmの土坑で、半分が調査区外になっている。内部から171の奈良時代の須恵器壺身が出土した。これも青色変色域内にあり、掘り方がはっきりと分からず、土の堅さと土器片および炭の細片の有無を頼りに掘り下げた。

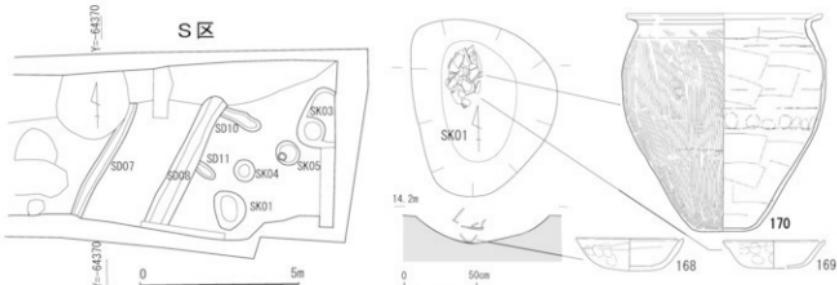
SK06（土坑）S区の中央部にある大きさ0.8m×0.8m、深さ約10cmの土坑で、土器の小破片が僅かに出土した。青色化のために覆土では判断できないが、土器片から奈良時代の遺構と推測する。

SK07（土坑）S区の中央部にある大きさ1.3m×1.0m、深さ約25cmの土坑で、半分が搅乱坑に切られている。土器は、土師器長胴甕の小破片が出土した。

SP01（小穴）S区の中央部にある大きさ0.7m×0.6m、深さ約25cmの小穴で、内部から172の須恵器



第9図 奈良時代の遺構



第10図 平安時代の遺構

高盤と173の奈良時代の須恵器坏身が出土した。これも青色変色域内にあった。

SP02（小穴）S区の中央部で検出した大きさ $0.5\text{m} \times 0.5\text{m}$ 、深さ約5cmの小穴で、内部から175の須恵器坏身が出土した。これも青色変色域内にあり、土のしまり具合と炭の細片の有無を頼りに掘り進めた。

・平安時代の遺構

SD07（溝）S区の中央部で検出した長さ約4m、幅約40cm、深さ約15cmの溝で、明瞭に識別することができた。覆土にO53窯式の灰釉陶器片が多く混じり、山茶碗の破片をまったく含まないことから、10世紀初頭に掘られた溝と推定する。底面はほぼ水平であり、流れている方向は分からず。

SD08（溝）S区の中央部で検出した長さ約4.5m、幅約70cm、深さ約15cmの溝で、SD07と同じ方向に伸びている。この溝も明瞭に識別することができた。土器は142と143の把手付鉢形もしくは瓶形のミニチュア土器と共にK90窯式とO53窯式の灰釉陶器片が多く出土した。山茶碗片をまったく含まないことから、これも10世紀初頭に掘られた溝と推定する。流れている方向は分からず。

SK01（土坑）S区の東端で検出した大きさ $1.2\text{m} \times 1.0\text{m}$ 、深さ約20cmの土坑で、平面形があにぎり型をしている。169の赤彩された土師器坏身と170の土師器長胴甕が出土した。またその直下に168の完形の土師器坏身が置かれていた。その他の土器は発見されなかった。170の長胴甕をその後に復元したこと、ほぼすべての破片が残っており、完形品になった。以上3点の土器が9世紀末～10世紀初頭に位置付けられることから、SK01は9世紀末～10世紀初頭に掘られたと推定する。

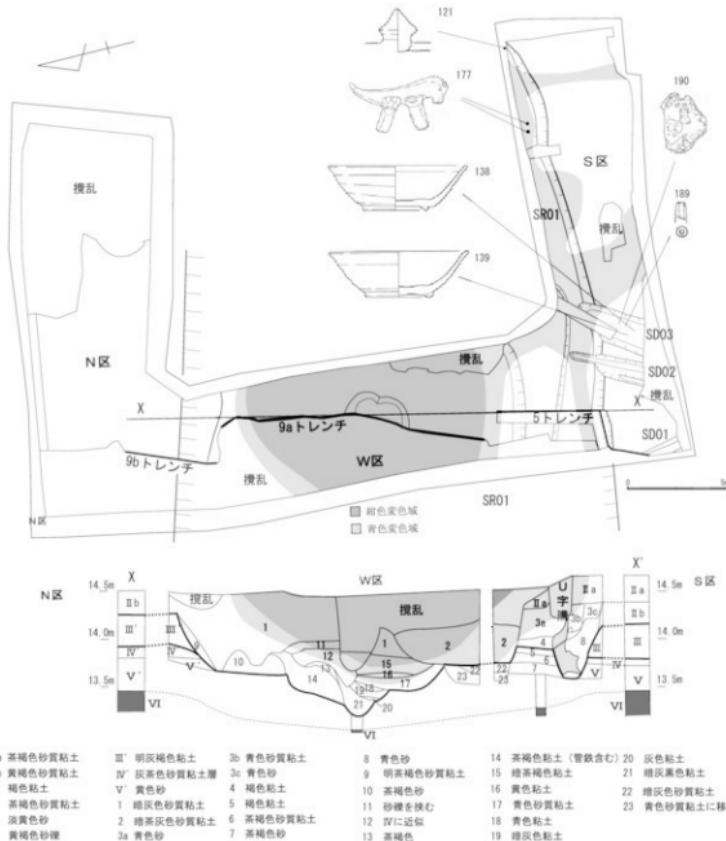
SK03（土坑）S区の東端で検出した大きさ $1.7\text{m} \times 1.2\text{m}$ 、深さ約15cmの土坑で、東側の一部が調査区外に伸びている。南西側に柱穴状の小穴がある。時期は、覆土の色などから平安時代と考える。

SK04（土坑）S区の東端で検出した大きさ $0.7\text{m} \times 0.7\text{m}$ 、深さ約15cmの土坑で、土器はまったく出土しなかった。時期は、覆土の色などからみて、平安時代であろう。

SK05（土坑）S区の東端で検出した大きさ $0.75\text{m} \times 0.75\text{m}$ 、深さ約10cmの土坑で、南西側に柱穴状の小穴がある。土器は、灰釉陶器の破片が少量出土した。これも平安時代の土坑と考える。

・中世の遺構

SR01（河川）幅約20mの河川と推定され、W区のほぼ全域が川底、N区が北岸、S区が南岸となっ



第11図 中世の遺構

ている。S区では、川岸が約21mにわたって検出された。第11図の下図はSR01のXX'横断土層図であり、縦方向の縮尺率を小さくしている。この土層図は9aトレンチ、9bトレンチ、5トレンチ、攪乱坑の側面を利用して、また離れた場所ではXX'線上に水平投影して作成している。図を見て分かるように、川は時期により流れを変えているらしく、複雑に切り合っている。そして攪乱と変色域が広いことと下層や北半部に無遺物層が多いことから、どの層がどの時代に堆積したものか正確に分からなかった。確実に言えることは、太線部分が中世の川が掘削した最大領域であること、砂層と砂礫層がほとんど無いことから急な流れは無かったことである。更に付け加えると、22層と23層が5世紀の水田の床土であること、5層の土壤がIV層と似ていることである。

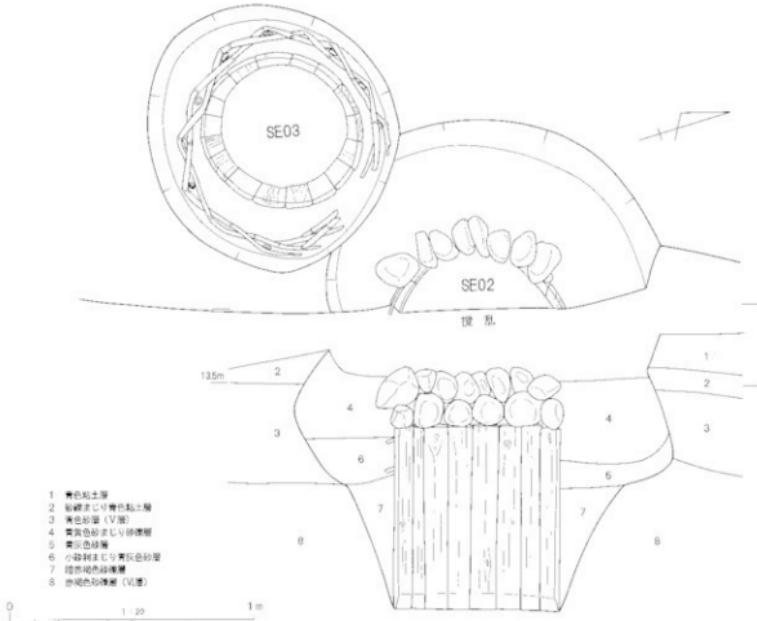
SD02(溝)S区の西半部にある長さ3.7m×幅1.1m、深さ約35cmの溝で、西側に狭い中段部がある。土器は131~135の山茶碗や内耳鍋の他、多くの小破片が出土した。13世紀の遺構である。

SD03(溝)S区の西半部にある長さ3.8m×幅1.6m、深さ約40cmの溝である。138と139のほぼ完成品の山茶碗、189の土錘、190の鉄滓などが出土した。この溝もSR01に流れ込んでいたとみえ、接続する川岸部分に山茶碗の破片の堆積が認められた。この溝も13世紀の遺構である。

・近世の遺構

SE02(井戸)W区の中央部で検出した井戸で、搅乱坑によって東側半分が破壊されている。掘り方は、直径約1.3m、深さ約1mを測る。下部に径約70cmの桶を埋め、上部に人頭大の川原石が2段に積まれている。井戸の底面は砂礫層を深く掘り込んでいる。遺物は全く出土しなかった。

SE03(井戸)SE02の南側で検出した井戸で、掘り方は、径約1m、深さ約1.1mを測る。下部に直径約60cmの桶を埋め、その上部に竹で編んだ構造物が廻っている。この井戸も砂礫層を深く掘り込んでいる。遺物は全く出土しなかった。SE02とSE03は、その構造からみて江戸時代末期につくられたものと推測する。両者の新旧関係は、SE03がSE02を切っているから、SE03の方が新しい。



第12図 近世の遺構

(3) 出土遺物

遺物全体の約 9 割が S 区から出土した。残りの約 1 割が W 区から、そして極わずかな土器が N 区から出土した。以下、包含層別および検出遺構別に出土遺物を示す。ただし特殊遺物は最後に記す。

・ II 層出土土器

7 ~ 13世紀（古墳～鎌倉時代）の遺物が出土した。W 区 II 層は攪乱と変色域が多く、確実に分層することができなかった。したがって川の堆積層の遺物が混入した可能性がある。

S 区（第13.14図）

1 ~ 10 が須恵器。1 は 7 世紀前半の小口径の坏身、2 は同じく 7 世紀前半の坏身で、底面にヘラ記号がある。3 と 4 は 8 世紀前半の丸みを帯びた坏身、5 は 8 世紀の坏蓋の摘み部分である。6 と 7 は 8 世紀後半～9 世紀前半の摘みが付いた坏蓋、8 は 8 世紀後半の脚部が欠損した高盤であろう。9 と 10 は 8 世紀の広口壺の口縁部と考える。

11 ~ 31 が土師器。11 と 12 は 8 ~ 9 世紀の坏身で、12 は内外面とも赤彩されている。13 は 8 世紀の皿で、内外面とも赤彩されている。14 は 8 世紀の有台皿で、内外面とも赤彩されている。16 ~ 31 は 8 世紀～9 世紀初頭の長胴甕であり、25 はその底部である。ただし 16 は 7 世紀後半に遡る可能性がある。

32 ~ 40 が灰釉陶器。32 は 9 世紀中頃の K14 窯式の灰釉陶器碗で、内面にトチ痕が認められる。角高台を持ち、灰釉が丁寧にハケヌリされている。33 は 9 世紀後半の K90 窯式の灰釉陶器皿で、三日月高台を持ち、内面に重ね焼き痕が認められる。35 ~ 38 は 10 世紀の O53 窯式以降の灰釉陶器碗で、三角高台を持ち、糸切痕が残るものが多い。39 は O53 窯式の大碗である。

41 は、粗雑なつくりと暗灰色の胎土からみて、藤枝市の助宗窯でつくられた「壺 G」と呼ばれる特殊な壺の頸部である。壺 G は、単純口縁、肩部に最大径がある、底部が糸切未調整、口クロ回転の痕跡が明瞭に残る、などの特徴を持つ。時期は 8 世紀末～9 世紀初頭である。

42 と 43 は外反した厚い口唇部を持つ 10 世紀の清郷型甕である。愛知県を中心に分布し、当地方の出土例は少ない。

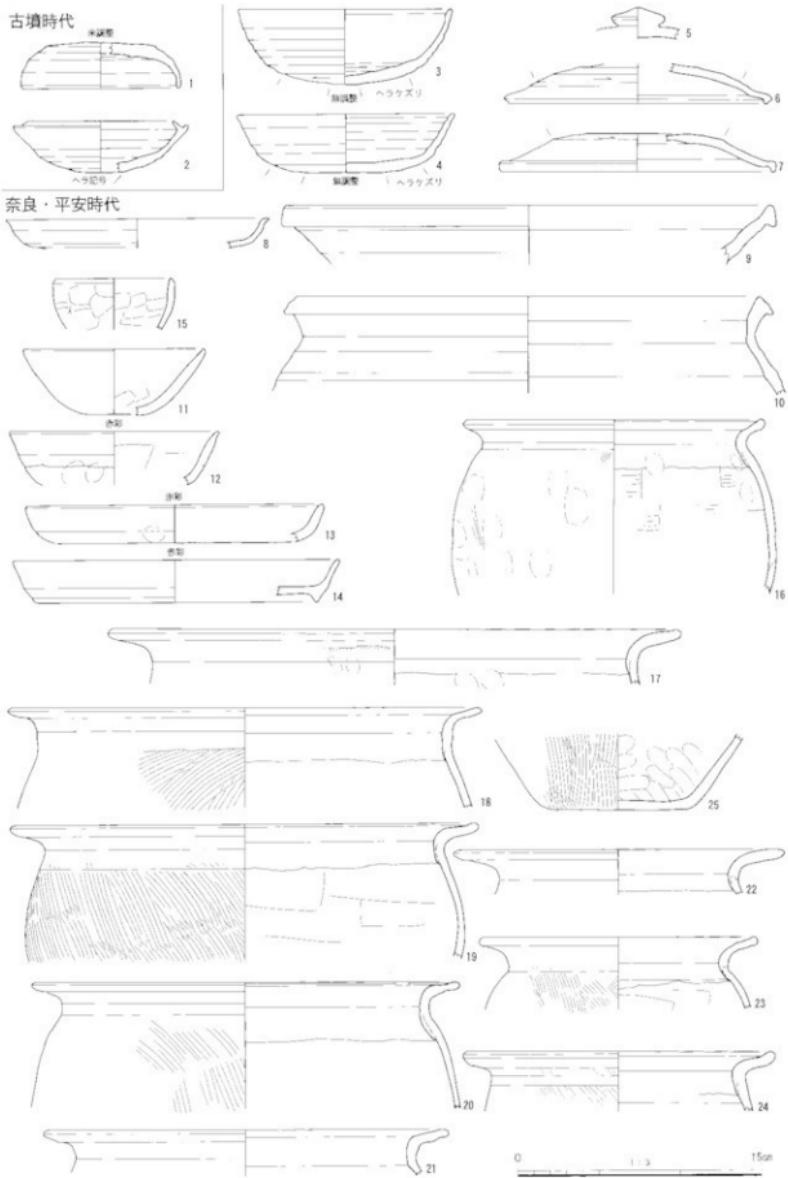
44 ~ 57 が山茶碗。44 ~ 52 は山茶碗の碗で、時期はやや高台の高い 44 が 12 世紀、平底に近い 49 が 13 世紀である。50 と 51 の高台にモミ痕が認められる。53 ~ 57 は山茶碗の小皿で、高台が付いている 54 が 12 世紀、他が 13 世紀である。58 は大鉢の底部であろう。

59 と 60 は中国産の青磁で、59 の外面に連弁文、60 の見込みに蓮華文が描かれている。時期は 60 が 13 世紀と考える。

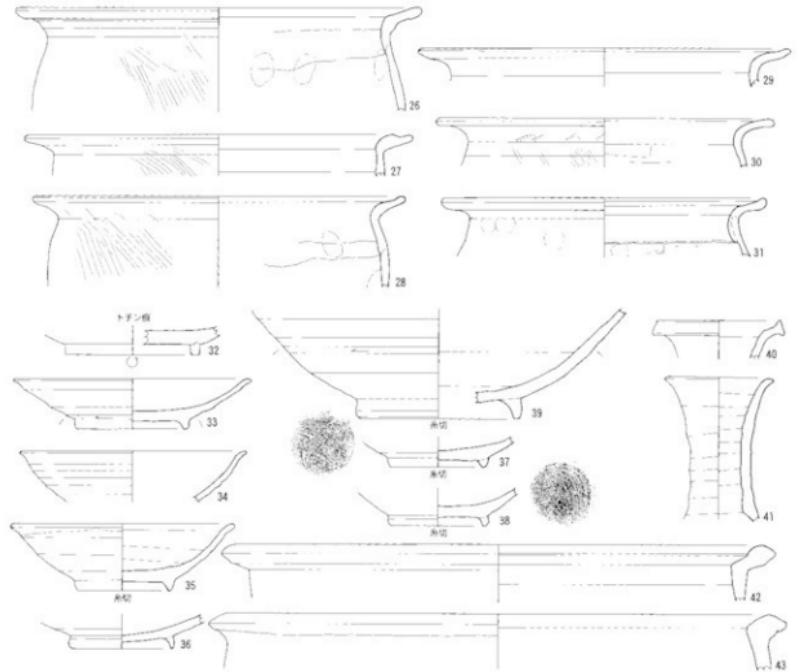
W 区（第15図）

61 ~ 64 が須恵器。61 は 8 世紀後半の坏身、62 は 8 世紀の有台坏の小破片である。63 は皿もしくは高盤であろう。64 は 8 世紀の陶臼で、底部に故意に開けた削孔が認められる。

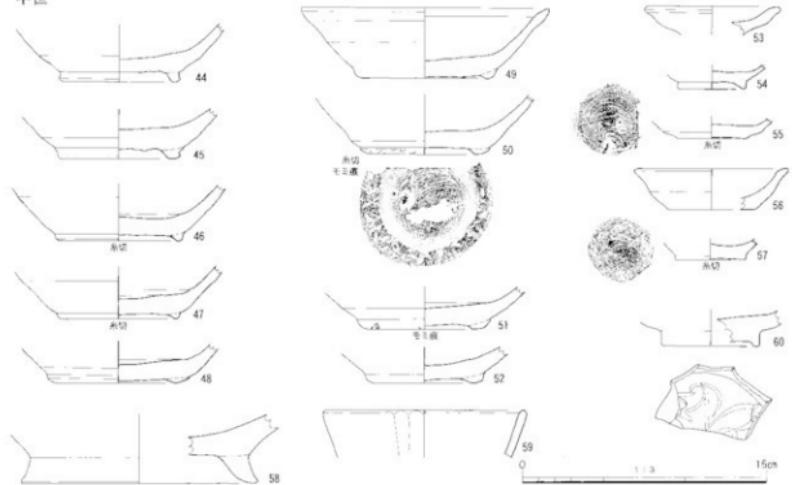
65 ~ 70 が土師器。65 は口縁部が内湾する 8 世紀中頃の坏身で、内外面とも赤彩されている。66 は内外面が赤彩され口縁部がまっすぐ伸びる 8 世紀後半の坏身、67 は 8 世紀中頃の内外面が赤彩されている皿である。68 は 8 世紀後半の赤彩された坏蓋の摘み部分、69 も赤彩された坏蓋の一部で、これらは同一個体と思われる。70 は 8 世紀の高い脚部をもつ高盤で、外面が赤彩されている。



第13図 II層出土土器 (S区①)

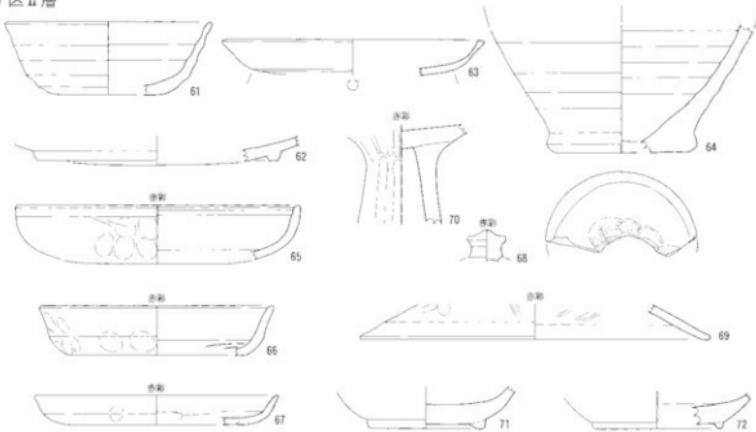


中世



第14図 II層出土土器 (S区②)

W区II層



N区II層



第15図 II層出土土器 (W区・N区)

71と72は12~13世紀の山茶碗の底部である。

N区 (第15図)

他区と比べて遺物量は少ない。図化しなかったが、その大部分は13世紀の山茶碗の破片であつた。73は8世紀の須恵器有台坏の小破片、74は8世紀の土師器台付甕の台部である。75は8世紀の土師器の皿で、内外面とも赤彩されている。

・III層出土土器 (第16図)

8~9世紀の土器が出土した。III層があるのはS区だけであり、N区のIII'層は無遺物層である。

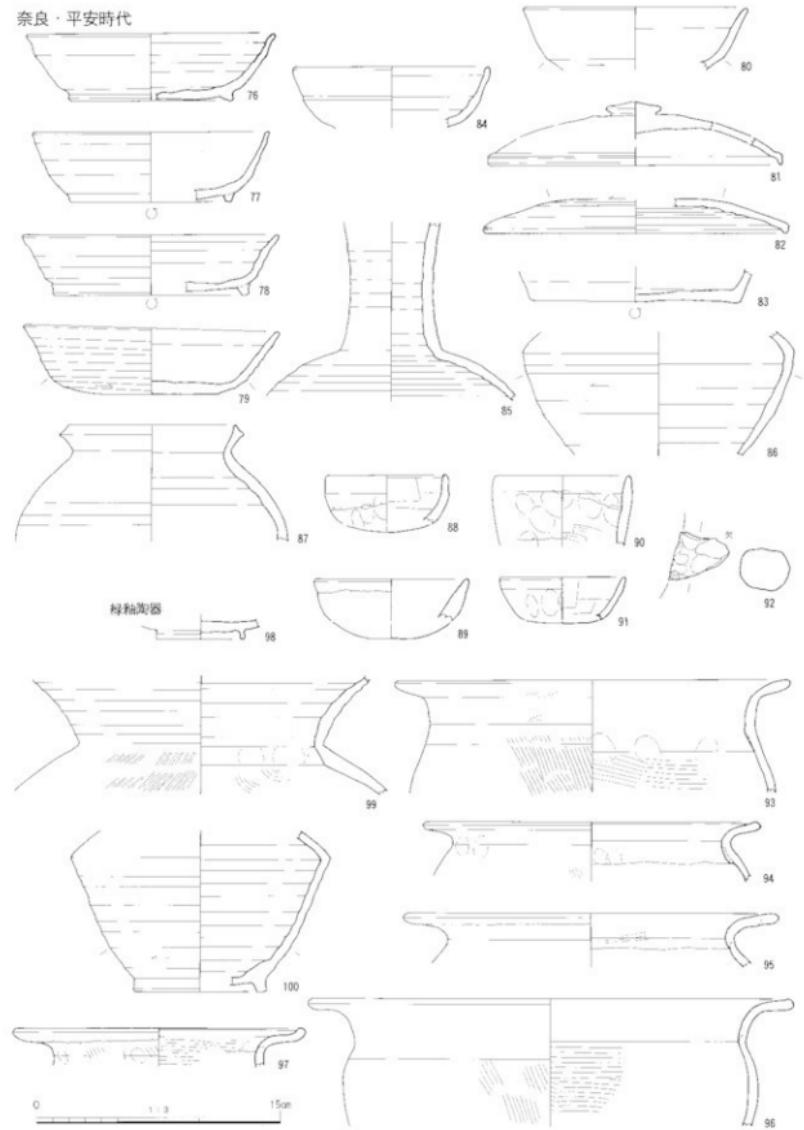
76~87が須恵器。76~78は8世紀の有台坏、79は8世紀後半の坏身である。80は8世紀の坏身であろうか。81と82は8世紀前半の摘み付き坏蓋、83は8世紀後半の箱坏である。84は8世紀の坏部であろう。85は長頸壺の頸部、86は長頸壺の体部で、時期は8世紀~9世紀前半であろう。87は肩折れしない広口壺で、7世紀末~8世紀初頭である。

88~97が土師器。88~90は手捏ね土器、91は坏身、92は把手付鉢もしくは甕の把手部分である。これらの時期は8世紀と考える。93~97は8世紀~9世紀初頭の長胴甕である。

98は緑釉陶器の碗もしくは皿で、やや内湾した薄い高台を持つ。内外面とも細かなヘラ磨きが認められ、釉が鮮やかな緑黄色に発色している。時期は9世紀後半と考える。

99は灰釉陶器の甕、100は灰釉陶器の長頸壺、と胎土から推定する。時期は9世紀後半であろう。

奈良・平安時代



第16図 III層出土土器

・SR01（河川）出土土器（第17図）

5～13世紀（古墳～鎌倉時代）の遺物が出土した。2～3の原因で確実な分層ができなかつたため、SR01から出土した遺物を一括して示す。

101～106が古墳時代の須恵器。101は初期須恵器壺類の小破片で、細かな波状文が頸部を廻っている。時期は5世紀後半で、胎土から大阪陶邑産と推定する。102は口縁部の内側を沈線が廻る高坏の坏部で、時期は7世紀前半である。103も高坏の脚部で、時期は同じく7世紀前半である。102と103は同一個体かもしれない。104は7世紀前半の坏蓋で、口縁部の外面に浅い沈線が廻る。105は7世紀中頃の坏身の小破片であろう。106は7世紀前半の広口壺で、球形の体部をもつ。

107～109が古墳時代の土師器。107は壺の口縁部である。108はやや内湾する口縁部をもつ甕で、109はくの字状に屈曲する口縁部をもつ甕で、時期は6～7世紀である。

110～113が奈良時代の須恵器。110は体部がやや丸みを帯びた8世紀の坏身、111は8世紀の有台坏、112はタタキ痕が残る8世紀の甕である。113は8世紀前半の高坏の脚部であろう。

114～118が奈良時代の土師器。114と115は坏身で、115は内外面とも赤彩されている。116～118は長胴甕の口縁部である。

119～122が平安時代の灰釉陶器。121については、その胎土からみて間違いなく灰釉陶器である。119は9世紀中頃の角高台をもつK14窯式の灰釉陶器碗であり、灰釉の発色も良く、また内側にトチン痕が認められる。120は10世紀前半の高い三角高台をもつO53窯式の灰釉陶器である。121は、一見、灰釉陶器の壺蓋の摘み部分と見える。しかし最大径が3.2cmと非常に大きくかつ背も高い。このように大きな壺蓋があるのであろうか。そこで調べてみたところ、類似したものが豊橋市の市道遺跡で出土しており、香炉蓋の摘みの可能性があることが分かった。接続する部分が出てこないかと周辺を探したが、結局発見できず、香炉蓋である確証は何も無い。今後に残された課題である。122は9世紀前半の長頸壺の口縁部であろう。

123～130が中世の山茶碗。123～129は高台の低い13世紀の山茶碗、130は平底かつ口縁部がまっすぐ伸びる13世紀の小皿である。128は高台の裏面に無数のモミ痕が認められる。

・SD02（溝）出土土器（第18図）

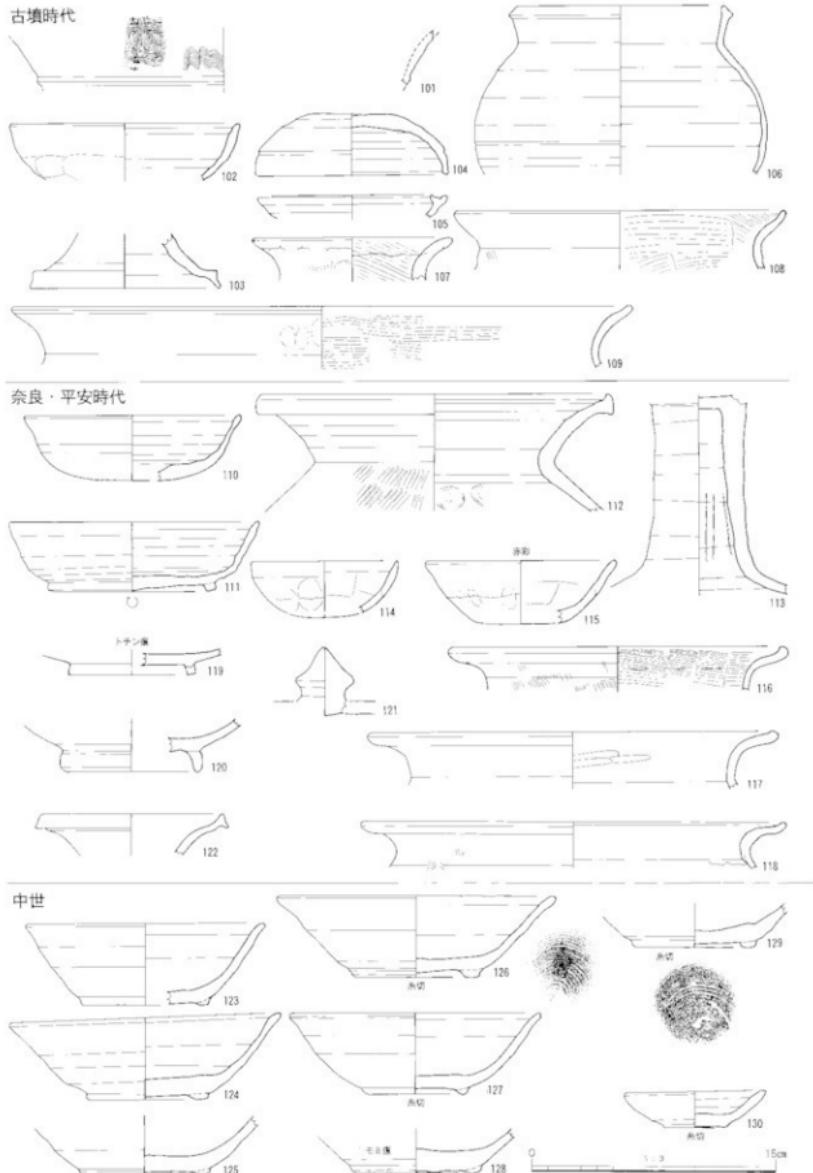
131は8世紀前半の土師器の坏身で、内外面とも赤彩され、内側に放射状暗文が描かれている。132は9世紀代の土師器の坏身であろう。133は瓶形もしくは把手付鉢形のミニチュア土器の把手部分である。134は土師器の坏身、135は中世の内耳鍋の口縁部である。

・SD03（溝）出土土器（第18図）

136は8世紀代の土師器坏蓋の摘み部分で、内外面とも赤彩されている。137は8世紀後半の有台皿の小破片と思われ、内外面とも赤彩されている。138は13世紀の山茶碗で、溝の上層からほぼ完形品で出土した。高台がやや高く内側にあることから、139よりやや古いと思われる。139も13世紀の山茶碗で、溝の上層からほぼ完形品で出土した。140は内耳鍋の口縁部である。

・SD04（溝）出土土器（第18図）

141は5世紀の土師器高坏で、脚部の破片がSD04内から出土し、坏部の破片がSD04の延長線上から出土した。



第17図 SR01出土土器

・SD08（溝）出土土器（第18図）

142は瓶形もしくは把手付鉢形のミニチュア土器である。143も同じくミニチュア土器の把手部分であり、両者は同一個体かもしれない。

・SD09（溝）出土土器（第18図）

144～149が須恵器。144は7世紀前半の坏身、145は8世紀の有台坏、146は8世紀前半の摘み付き坏蓋、147は8世紀後半の坏身である。148は8世紀の内湾する鉄鉢形須恵器であり、非常に珍しい。149は8世紀の大甕の破片で、外面にタタキ痕が残る。

150～160が土師器。150は8世紀前半の内外面とも赤彩された坏身で、内面に放射状暗文が描かれている。151～153は坏身、154は手捏ね土器、155は瓶もしくは把手付鉢の把手部分である。156～160は8世紀代の甕と思われる。ただし159は7世紀に遡るかもしれない。

・SE01（井戸）出土土器（第19図）

7世紀後半～8世紀の土器が出土した。161と162が須恵器。161は8世紀の甕もしくは壺の口縁部と思われる。162は8世紀の広口壺である。

163～167が土師器。163は7世紀後半～8世紀前半の甕であろう。164は7世紀後半～8世紀前半の内外面とも赤彩された坏身で、内面に放射状暗文が描かれ、外面に横方向のヘラ磨きが認められる。165は8世紀の小型の坏身であろう。166と167は8世紀の長胴甕の口縁部である。

・SK01（土坑）出土土器（第19図）

168は9世紀後半～10世紀初頭の土師器の坏身である。169も9世紀後半～10世紀初頭の土師器坏身で、内外面とも赤彩されている。170はくの字状に曲がる口縁部をもつ長胴甕で、接合後にほぼ完形品となった。時期は、9世紀後半～10世紀初頭に位置づけられる。168は、170の真下から完形品で出土した。良好な一括資料である。

・SK02（土坑）出土土器（第19図）

171は8世紀の有台坏である。他に土器は出土しなかった。

・SK03（土坑）出土土器（第19図）

176は8世紀後半～9世紀初頭の長胴甕であろう。

・SP01（小穴）出土土器（第19図）

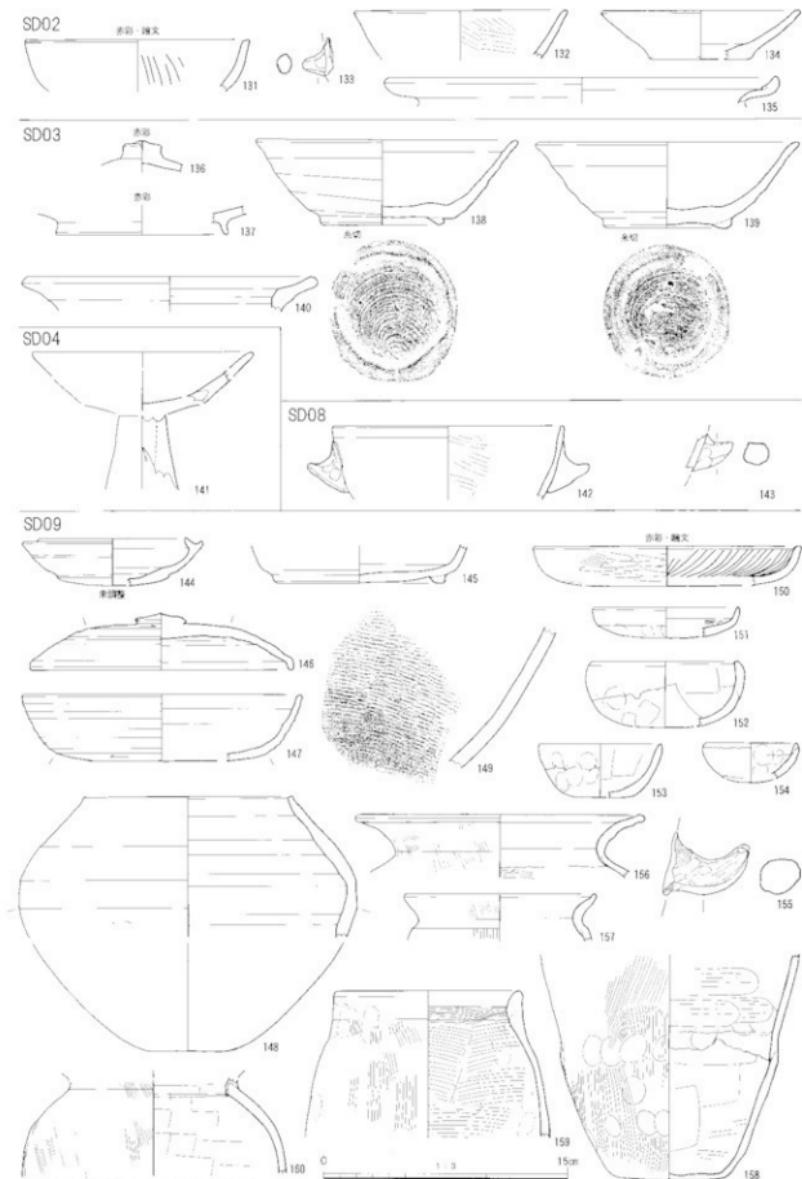
172は8世紀後半の須恵器の盤もしくは高盤であろう。173は8世紀後半の須恵器の坏身である。174は8世紀前半の内外面とも赤彩された土師器の坏身で、内面に放射状暗文が描かれている。

・SP02（小穴）出土土器（第19図）

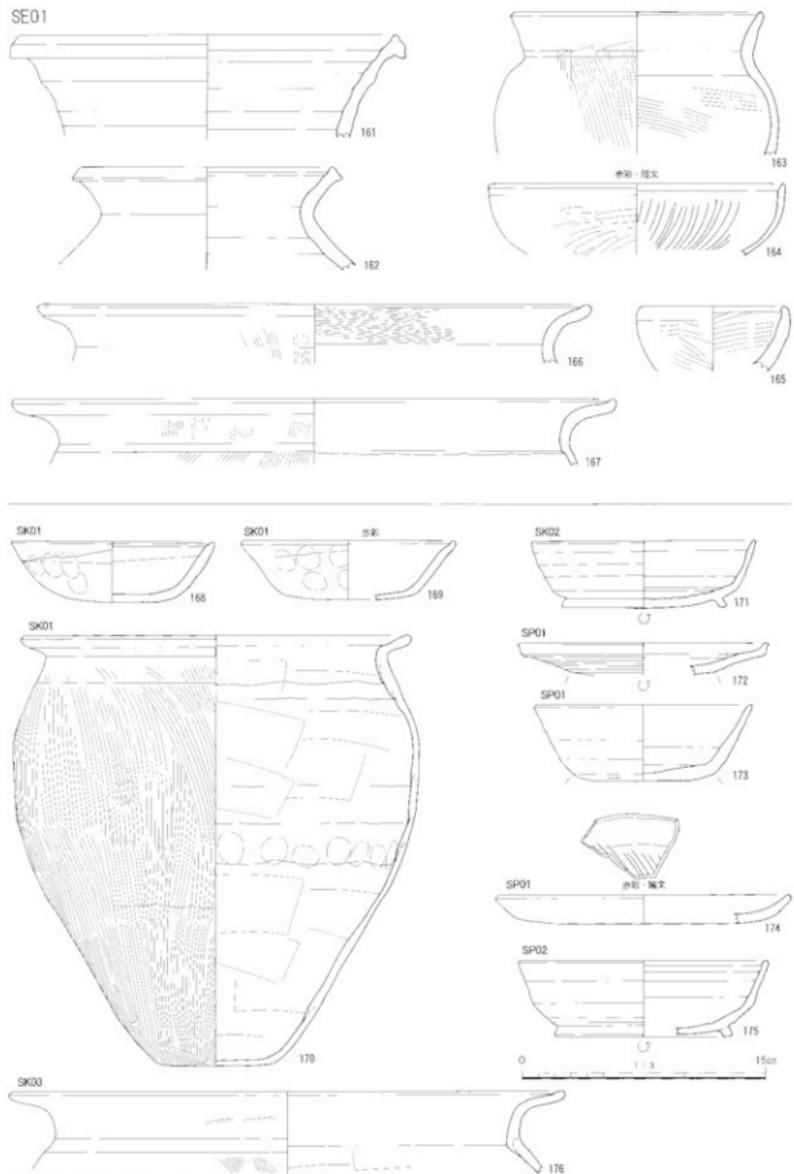
175は8世紀の有台坏である。

・特殊遺物（第20図）

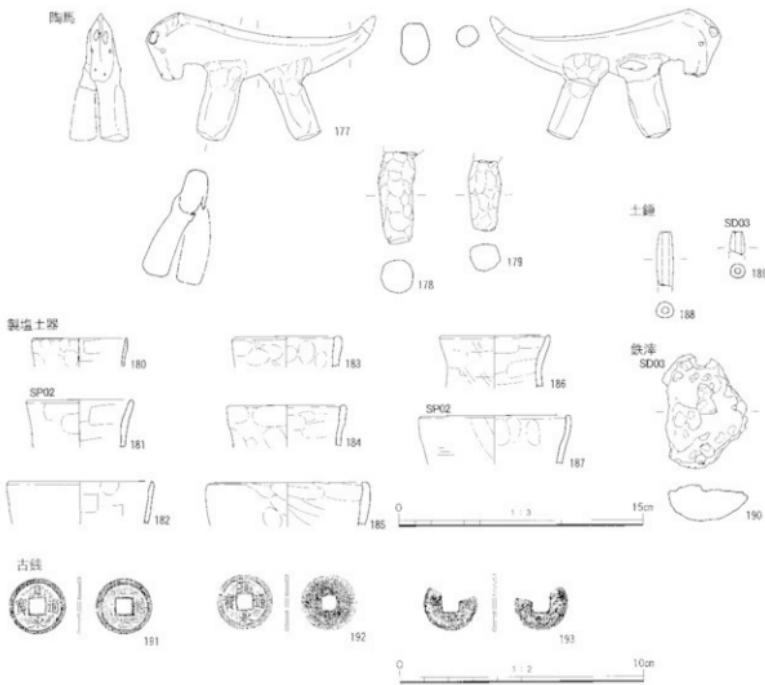
177～179が陶馬。177は3つの破片で出土したが、接合した結果、右前脚と右後脚および尾の先端を欠くだけのほぼ完形品になった。鞍や三繫などを表現しない裸馬であるが、耳、目、口、鼻、たてがみ等の細部を丁寧につくっている。178は陶馬の脚部であるが、177と接合しなかった。179も陶馬の脚部であるが、177とは接点が無く、別個体である。また178とも別個体である。



第18図 遺構 (SD) 出土土器



第19図 遺構 (SE、SK、SP) 出土土器



第20図 特殊遺物

180～185は渥美半島でつくられた製塩土器である。塩を入れた状態で当遺跡まで運んできて、容器を壊して塩を取り出したと考える。外面に沸きこぼれ痕や加熱による剥離と推測される痕跡が認められるものがある。180～182は口唇部が尖塔状につくられ、183～185は口唇部に面を持っている。今回の調査では、体部の破片だけで、角部分は発見されなかった。また図化しなかったが、もう1点体部の破片があり、合計7点が出土したことになる。

186と187は、その形状からみて製塩土器である可能性が高いが、確証を得られなかった。手捏ね土器であることは間違いない。

188と189は土錘である。時期は、189が山茶碗の入っていたSD03から出土していることから、13世紀と推定する。188もSD03周辺から出土している。

190は碗型鉄滓である。近接地で小鋳造が行われていたと思われる。時期は、SD03から出土したことから、13世紀と推定する。ふいごの羽口などの鋳造に関連する遺物は出土しなかった。

191～193は江戸時代の寛永通宝で、193は一部が欠けている。S区に江戸時代の土器が多数入った擾乱坑があったが、それに関連する遺物であろう。

第4章 総括

(1) 遺構と遺物

古墳時代は水田耕作に伴う溝を検出し、土師器高坏と初期須恵器が出土した。奈良時代は井戸、大溝、土坑、小穴を検出し、鉄鉢形須恵器、陶馬、手捏ね土器、製塙土器と共に須恵器や土師器が出土した。平安時代は溝と土坑を検出し、壺Gと呼ばれる長頸壺、綠釉陶器、K14窯式の灰釉陶器、香炉蓋の可能性のある宝珠形摘みと共に灰釉陶器や土師器が出土した。中世は溝と自然流路を検出し、碗型鉄滓、土鍤と共に山茶碗や青磁などが出土した。近世は井戸を検出し、古銭が出土した。

以上のように今回の調査では、各時代とも遺構は非常に少ないが、遺物は意外に多く出土した。この状況は、当調査区が集落の外れに位置していることを物語る。また遺物がS区に集中していることから、集落の中心はいつの時代も調査区の南側近接地にあったと推測する。

(2) 注目すべき遺物

鉄鉢形須恵器（148、試掘-2）本調査で出土した口縁部が窄んだものと試掘調査で出土した口縁部が開いたものの2点がある。同一遺跡で2点の出土は珍しい。西遠江においては、大知波峠廃寺、郡衙関連遺跡である可能性の高い吉美中村、そして城ノ前の3遺跡から出土している。

陶馬（177～179）湖西古窯跡群で生産されて、周辺の東三河、遠江、駿河に供給されたが、特に旧浜松市内と浜名湖周辺に濃密に分布している。生産地の窯跡を除けば、全体の50%強が郡衙関連遺跡からの出土であり、官衙的色彩が強い祭具として使用されたと推測される。陶馬には、鞍や三繫などを表現した飾馬と表現しない裸馬の2種類があり、飾馬から裸馬へ、大型から小型への型式変化が見られる（鈴木、2009）。笠井遺跡の陶馬は裸馬で大型であるから、8世紀後半に位置付けられる。陶馬を用いた祭祀には、墓葬祭祀、峠神祭祀、井戸祭祀、河川祭祀、祈雨祭祀などが考えられるが、遺物が元位置を保っていないことから推測の域を出ない。近くに井戸や大溝があることから、おそらく井戸祭祀、河川祭祀、祈雨祭祀などの水辺の祭りが執り行われたのであろう。

壺G（41）8世紀末～9世紀初頭に駿河の助宗窯と伊豆の花坂窯で生産された長頸壺で、関東地方から東海地方を中心に分布している。また平城京、長岡京、平安京などの都城や秋田城や多賀城などの城柵からも出土している。それらの多くは官衙関連遺跡もしくは交通の要所である。粗雑なつくりでありながら都城や遠隔地に運ばれていることから、その用途に関心が持たれ、鰐の煮汁運搬容器説、兵士の携帯水筒説、仏教用具とし



第21図 特殊遺物出土遺跡

No	遺跡名	遺跡の性格	数
1	笠井	都衙関連?	3
3	恒武西浦	都衙関連?	2
5	箕輪		1
6	中田北		1
7	宮竹野際	長田都衙関連	4
8	森西	長田都衙関連	1
9	木船	長田都衙関連	1
10	山の神	長田都衙関連	1
12	村前山東		1
13	伝光明山古墳		1
14	川の前		1
16	川久保	引佐都衙関連	2
17	井通	引佐都衙関連	1
18	伝龍潭寺		1
19	矢畠		3
20	鶴代		1
21	中村	敷智都衙関連	6
22	梶子北	敷智都衙関連	13
24	梶子	敷智都衙関連	1
25	伊場	敷智都衙関連	2
26	城山	敷智都衙関連	3
29	村西		3
30	東前		1
31	浅間山		10
33	城ノ前		2
34	半田ヶ谷		3
35	西門	浜名都衙関連?	2
36	雉子田	浜名都衙関連?	1
37	横枕I	浜名都衙関連?	3
A	大沢古窯	窯跡	27
B	古見14地点	窯跡	2
C	古見16地点	窯跡	2
D	東笠子2地点	窯跡	1
E	東笠子3地点	窯跡	2
F	東笠子44地点	窯跡	1
G	東笠子43地点	窯跡	2
H	西笠子14地点	窯跡	
J	殿田4地点	窯跡	1
K	早稲川第3号窯	窯跡	1

表1 陶馬出土地（西遠江）

No	遺跡名	遺跡の性格	数
1	笠井	都衙関連?	1?
11	下滝		3
39	大知波峠廃寺	寺院	

表2 香炉出土地（西遠江）

No	遺跡名	遺跡の性格	数
1	笠井	都衙関連?	1
2	笠井若林	都衙関連?	3
7	宮竹野際	長田都衙関連	1
8	森西	長田都衙関連	2
14	川の前		1
15	祝田		7
17	井通	引佐都衙関連	2
21	中村	敷智都衙関連	2
22	梶子北	敷智都衙関連	4
25	伊場	敷智都衙関連	1
26	城山	敷智都衙関連	4
27	九反田	敷智都衙関連	1
37	横枕I	浜名都衙関連?	1
38	東笠子27地点	集落	2?
39	大知波峠廃寺	寺院	10

表3 緑釉陶器出土地（西遠江）

No	遺跡名	遺跡の性格
1	笠井	都衙関連?
3	恒武西浦	都衙関連?
4	恒武山ノ花	都衙関連?
8	森西	長田都衙関連
11	下滝	
17	井通	引佐都衙関連
19	矢畠	
21	中村	敷智都衙関連
22	梶子北	敷智都衙関連
23	梶子北(三永)	敷智都衙関連
25	伊場	敷智都衙関連
28	鳥居松	敷智都衙関連
30	東前	
32	舞阪町天白	

表4 製塩土器出土地（西遠江）

No	遺跡名	遺跡の性格	数
1	笠井	都衙関連?	1
2	笠井若林	都衙関連?	1
3	恒武西浦	都衙関連?	1
11	下滝		1
14	川の前		3
22	梶子北	敷智都衙関連	1
24	梶子	敷智都衙関連	1
25	伊場	敷智都衙関連	6
26	城山	敷智都衙関連	5
28	鳥居松	敷智都衙関連	1

表5 壺G出土地（西遠江）

ての花瓶説などが提示されている。

製塙土器（180～185）渥美半島でつくられた塙が容器ごと運ばれてきて、当遺跡で壊して塙を取り出したため、容器の破片が残された。西遠江で製塙土器が注目されたのは最近のことであり、過去に見落とした遺跡があるかもしれない。それにしても出土遺跡が少なく、表に示したように、郡衙関連遺跡からの出土が目立つ。

K14窯式灰釉陶器（32,119）灰釉陶器が生産され始めた初期の製品であり、丁寧なつくりである。官衙や経済力をを持つ集落に優先して供給されたと思われる。西遠江における出土例は、城山、伊場、宮竹野際、東前、梶子北の各遺跡で、東前以外は郡衙関連遺跡である。

綠釉陶器（98）中国産の青磁や白磁を模倣してつくられた高級食器もしくは仏具で、普通の遺跡から出土する例は少ない。西遠江においては、寺院や郡衙関連遺跡からの出土が多い。最近では東三河の二川古窯跡群でも生産されていたことが確認された。

香炉蓋（121）破片であるため、この摘みが香炉蓋であるという確証はない。可能性がある、程度に留めておきたい。西遠江において、香炉は大知波峠廃寺と下滝の2遺跡から出土している。

（3）遺跡の性格

少量の遺物だけで遺跡の性格を判断することは危険であるが、あえて当調査区の近接地にある奈良・平安期の集落の性格について簡単に考えてみたい。上記した特殊遺物は、必ずしも寺院や郡衙関連遺跡だけでなく、普通の集落遺跡からも出土している。しかしこれだけの種類が揃うことは珍しく、確率的にも郡衙関連遺跡である可能性を高めている。土器については7世紀前半から始まり10世紀まで満遍なく出土しており、安定した集落が長期間にわたって存続していたことが伺える。特に8世紀～9世紀後半の土器は充実しており、特殊遺物の大部分はこの時期の製品である。郡衙となるべき基盤は整っていたと思われる。

西遠江における郡衙の形態は、施設が一箇所に集中せず、各施設が広範囲に分散配置される傾向が強いことが指摘されている。また敷智郡衙のように時代の変化により施設が近くに移転して範囲が広がった例もある。したがって西遠江では一定範囲の遺跡を群として捉え、そこに郡衙を想定している。そこで笠井遺跡周辺を見てみると、笠井若林遺跡で複数の円面硯と墨書き土器、社口遺跡で円面硯、山の花遺跡で墨書き土器、陶馬、人面墨書き土器などが出土しており、これらと笠井遺跡の遺物を合わせれば、笠井遺跡や恒武遺跡群がのる自然堤防上に郡衙を想定してもまんざら的はずではないと思う。笠井遺跡の調査は今回が2回目であり、まだ始まったばかりである。これから徐々に様子が明らかになっていくと思われる。今後の調査に期待したい。

参考文献

- 2003 静岡県教育委員会 「静岡県の古代寺院・官衙遺跡」
- 2006 静岡県考古学会 「古代の役所と寺院」
- 2009 鈴木敬則 「祭祀遺物」、「舞阪町天白遺跡」 浜松市教育委員会
- 1999 佐野五十三 「壺Gの成立と伝播」 『静岡県考古学研究31』・他

写真図版



図版 1A S区遺構（東から）



図版 1B W区遺構（南西から）

図版 2A
SR01と陶馬出土状況
(東から)



図版 2B
SE01(北西から)



図版 2C
SE02・SE03(東から)



図版 3A
SK01(東から)



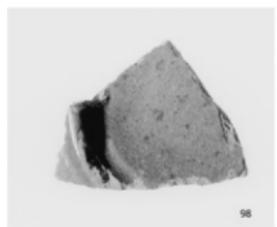
図版 3B
SK02(北から)



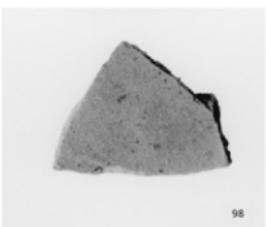
図版 3C
SP01(北東から)



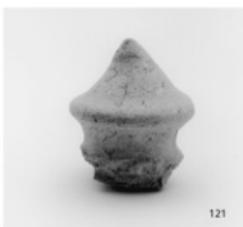
图版4 出土遗物 1



98

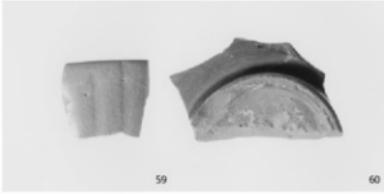
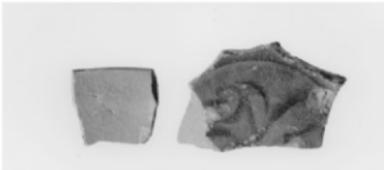


98

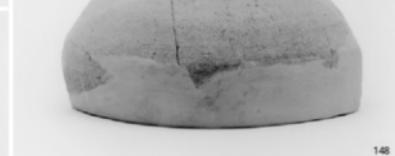


121

图版 5 出土遗物 2



图版 6 出土遗物 3



图版 7 出土遗物 4



報告書抄録

書名	笠井遺跡（かさいいせき）2次				
副書名					
卷次					
シリーズ名・番号					
編著者名	大野勝美				
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部生涯学習課（文化財担当） (浜松市教育委員会の補助執行機関) 〒430-0946 浜松市中区元城町103-2 053(457)2466				
発行機関	財団法人 浜松市文化振興財団 〒430-7790 浜松市中区板屋町111-1				
発行年月日	2009年12月25日		調査面積		426m ²
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経
		市町村	遺跡番号	○○°○'○"○"	○○°○'○"○"
笠井遺跡	静岡県浜松市 東区笠井町	22202	2-02-15	34度 46分 14秒	137度 47分 49秒
調査原因	宅地造成工事				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
笠井遺跡	集落	古墳時代	溝	須恵器、土師器	
		奈良時代	井戸、大溝、土坑 小穴	須恵器、土師器、陶馬、製塩土器 手捏ね土器	
	集落	平安時代	溝、土坑、小穴	灰釉陶器、綠釉陶器、 土師器、清郷型甕	
	集落	鎌倉時代	河川、溝	山茶碗、青磁、鉄滓、土鍾	
		江戸時代	井戸	寛永通宝	

笠井遺跡 2次

2009年12月25日発行

編集機関 浜松市教育委員会

発行機関 財団法人 浜松市文化振興財団

印 刷 株式会社 シバプリント

